

実践 体験学習を詠む

使用教材：「たのしみは」「俳句を作ろう」（六年）

1 はじめに

本校では、六年生が新潟で二泊三日の宿泊体験学習を行う。本単元は、その体験学習から生まれた、総合的な学習の時間と関連する大単元の一つである。

国語科について言えば、体験学習の前に、①「書くこと」として、依頼の手紙、②「話すこと・聞くこと」として、事前情報交換会での資料を提示しながらの説明、③「書くこと」として、お礼の手紙、④「話すこと・聞くこと」として、資料を提示しながらの活動報告、⑤「書くこと」「書写」として、短歌や俳句を詠むという三つの小単元に取り組んだ。本実践は、この中の⑤を取り上げたものである。

「書くこと」の学習において難しいのは、課題設定と取材である。自分が書きたい、伝えたいと思う題材を設定できるかが、学習を成立させるポイントであろう。その点で、本単元は、印象に残る体験学習が、課

2 指導計画（全六時間）

第一次（一時間）

これまでに暗唱した短歌や俳句を出し合ったり、体験学習の思い出を語り合ったりする。教材文「たのしみは」を読んで、学習課題「越後体験学習で心が動いたことを、使う言葉を工夫して短歌や俳句に表そう」を設定し、学習計画を立てる。

第二次（三時間）

思い出の中から題材を決め、百字、百四十字で心が動いた瞬間のことをまとめる。次に、短歌や俳句の音数に関するルールを知り、文章を短くしていきながら短歌や俳句のリズムを整える。そして、言葉の順序や表記を工夫して、自分の作った短歌や俳句を吟味し、完成させる。

第三次（二時間）

色紙に短歌や俳句を毛筆で清書する。掲示した作品を見合せて交流し、単元全体の振り返りをする。

第二次 第三時

（本時目標）使う言葉を選びながら、短歌や俳句の音数に合わせて伝えたいことをまとめることができる。

ワークシート2を使い、前時でまとめたものをさらに短い文章にリライトし、そこから短歌や俳句の音数に整えていく。最初から五・七・五等のリズムで作らせると、音数を合わせることにばかり意識が向いてしまい、心情や情景を詠む点が甘くなってしまう。短歌と俳句の選択もこの時点で初めて行うようにした。

第二次 第四時

（本時目標）言葉の順序や表記を工夫して、短歌や俳句を吟味することができる。

教科書の巻末資料「俳句を作ろう」を参考に、作ったものの推敲を行った。いろいろな順序や表記を試してみること、それぞれが納得のいく短歌や俳句を完成させることができた。また、言葉の響きを意識できるように、音読しながら吟味するようにもした。

3 指導の実際

第二次 第二時

（本時目標）心が動いた瞬間のことを、五感を働かせながら思い出し、百字、百四十字程度でまとめることができる。

題材を決めるときには、印象に残ったある瞬間をとらえるようにする。漠然とした「〇〇して楽しかった」といった感想では、短歌や俳句に表しにくいのである。ワークシート1を使い、五感を働かせて、具体的にそのときの様子を思い出させる。

越後体験学習を詠む 六年 一組 氏名

① 越後体験学習の思い出を、短歌や俳句のリズムに整えよう。

② 前時に書いた文章を、短歌や俳句の音数に合わせて書き直そう。

③ 五感を働かせながら、心が動いた瞬間について、百字、百四十字程度で、自分の感じたことを書き出そう。

④ 短歌や俳句の音数に合わせて、文章を短くしていきながら短歌や俳句のリズムを整えよう。

⑤ 短歌や俳句の音数に合わせて、文章を短くしていきながら短歌や俳句のリズムを整えよう。

ワークシート1
②に書いた言葉は、実際の短歌や俳句の中で使う児童が多かった。

4 おわりに

本実践は「書くこと」及び「書写」の指導事項に主眼をおいたものであるが、中学年の「伝国」アー（ア）との関連を生かし、少しでも文末を文語調にしてみたり、音読することで言葉の響きやリズムを感じたりしながら、作っていくことができた。

越後体験学習を詠む 六年 一組 氏名

① 越後体験学習の思い出を、短歌や俳句のリズムに整えよう。

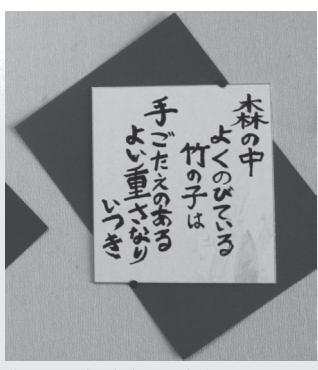
② 前時に書いた文章を、短歌や俳句の音数に合わせて書き直そう。

③ 五感を働かせながら、心が動いた瞬間について、百字、百四十字程度で、自分の感じたことを書き出そう。

④ 短歌や俳句の音数に合わせて、文章を短くしていきながら短歌や俳句のリズムを整えよう。

⑤ 短歌や俳句の音数に合わせて、文章を短くしていきながら短歌や俳句のリズムを整えよう。

最終的には、「森の中 よくのびている 竹の子は 手ごたえのある よい重さなり」という短歌に決定した。



作った短歌や俳句は、小筆で「行間・余白・文字の大きさ」に気をつけながら清書した。

